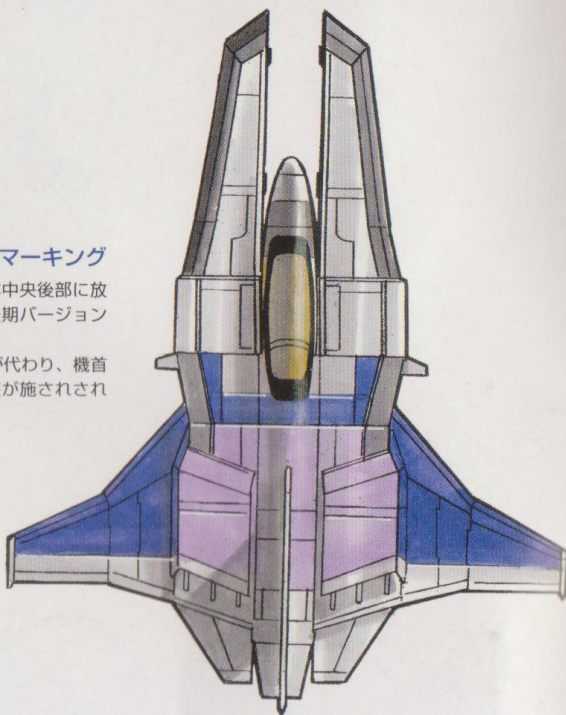
構成／柿沼 秀樹

生紙を使用しております。
W176-J1(SLPM 62462)

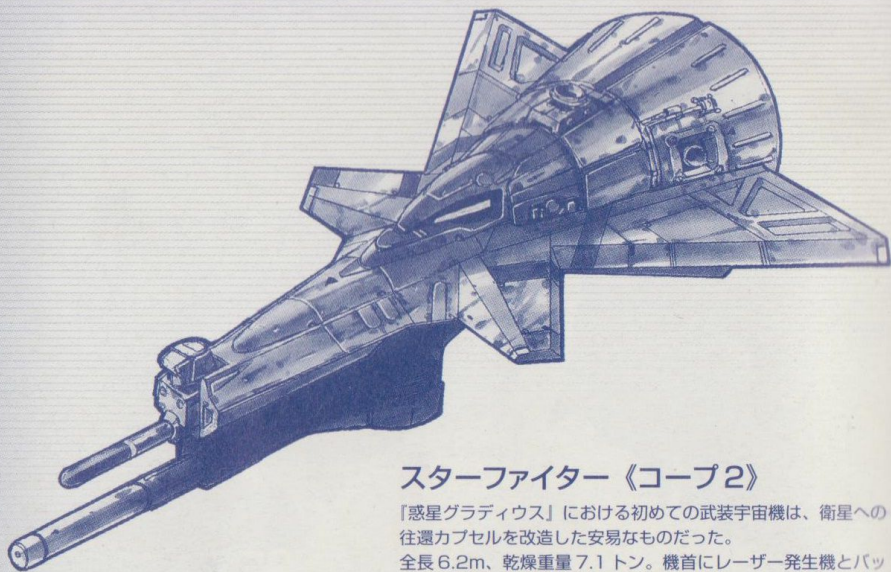
A113式マーキング

開戦１年目における最もオーソドックスな、バイパーのマーキング例。
コーバナイト合金の機体表面にパールホワイトの光学兵器反射塗料を塗っている。ブルーの塗装部分は《敵味方識別マーキング帯》で、ブルーレーザーによって遠距離から所属中隊、機体ナンバー等の機体のアイデンティティを読み取ることができる。

ビックバイパー・量産型・マーキング

A116式マーキング

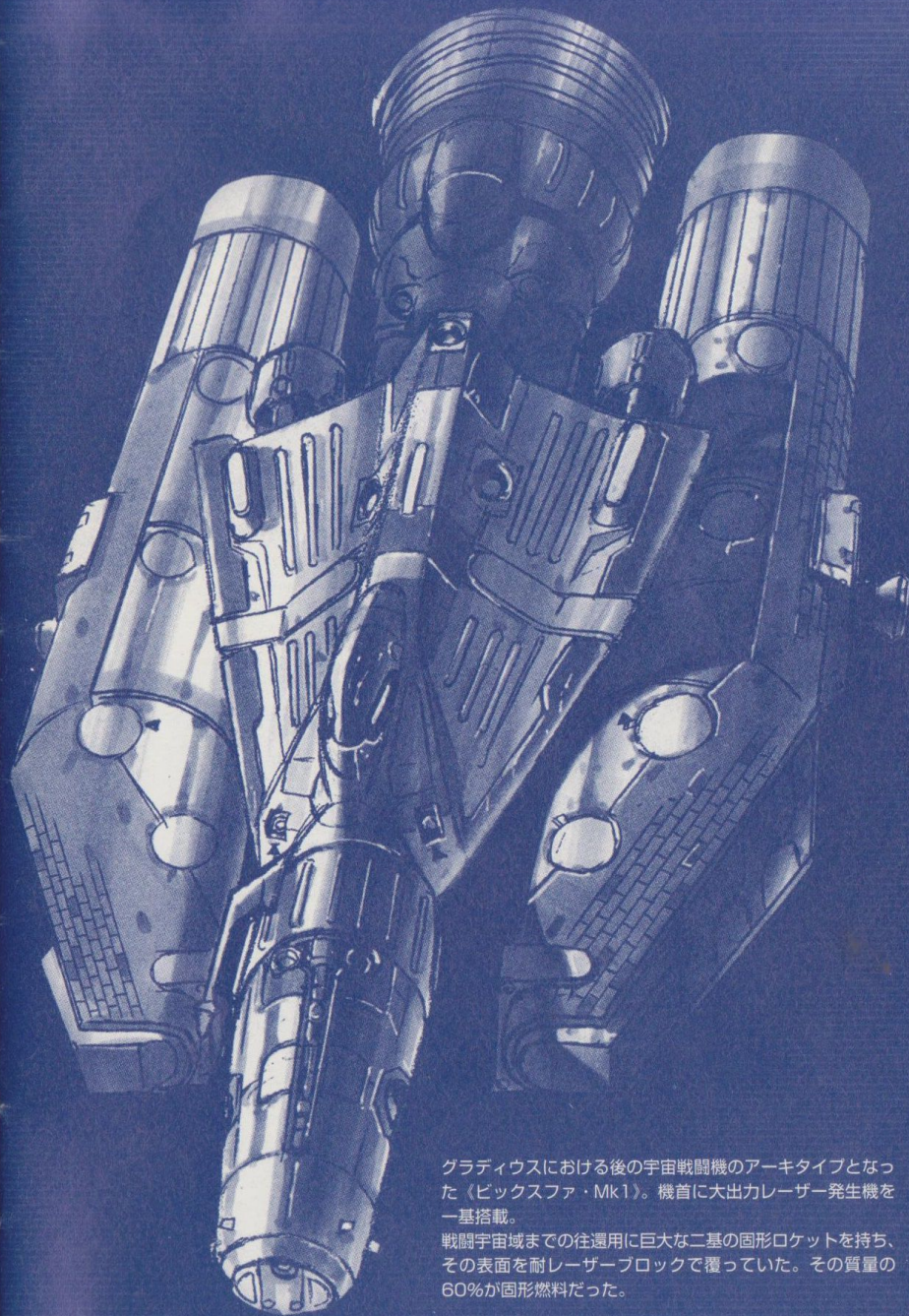
敵の放熱追尾兵装に対抗するため、機体中央後部に放熱防止用のパープル塗料を塗った大戦後期バージョンのマーキング。
《敵味方識別マーキング帯》の塗装形状が代わり、機首には反射防止のためのアンチグレア塗装が施されされている。

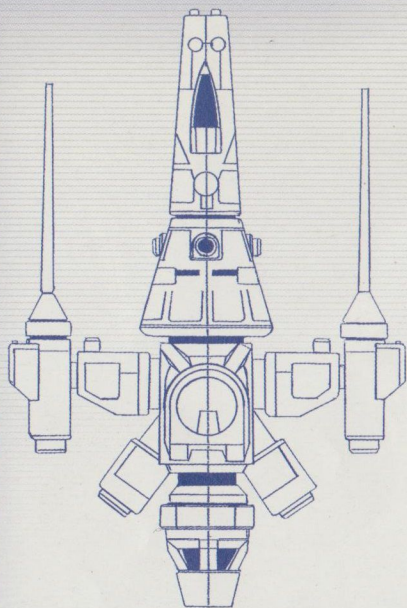
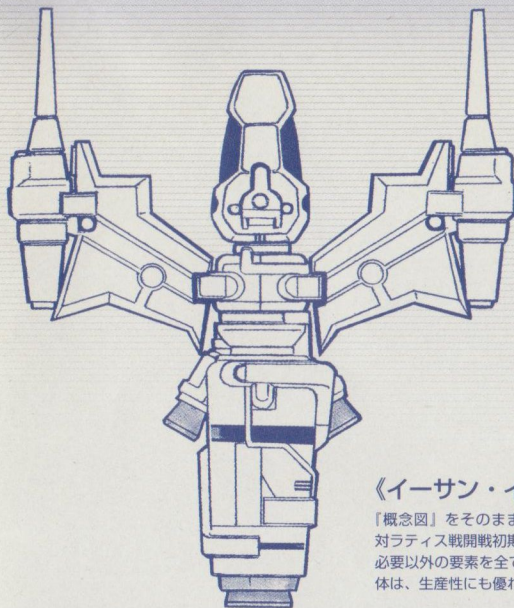
The history of "VIC VIPER"

ビックバイパー開発史

スターファイター《コープ2》

『惑星グラディウス』における初めての武装宇宙機は、衛星への往還カプセルを改造した安易なものだった。
全長6.2m、乾燥重量7.1トン。機首にレーザー発生機とバッテリーを搭載していた。

第一惑星『グラディウス』の衛星『ポスウェル』までの48万キロの距離を制覇して、初めてグラディウス人を『ポスウェル』まで送り届けたのは、２人乗りの小さな宇宙船である。それは『グラディウス惑星航空宇宙局』の開発した極めて単純な構造の有人宇宙機で、液体水素を主剤とするプロペラント（推進剤）を搭載した簡素なカプセル《コープ１》だった。しかし衛星に着陸したグラディウスの宇宙飛行士たちはそこで衝撃的な事実を知る。それは、以前よりラジオ波の受信等により、異文明の存在が確認されていた第四惑星『ラティス』の宇宙飛行士たちが、すでに衛星『ポスウェル』に着陸、探査を進めていたという事実であった。これに衝撃を受けたグラディウス統一政府は『惑星航空宇宙局』に対し直ちに武装した宇宙機の開発を命じた。そして『ポスウェル』への初着陸から僅か４カ月後に、《コープ１》の機首にレーザー発生機とバッテリーを搭載し、さらに照準用の測距儀等を増設した一人乗りの武装宇宙機《コープ２》を製作し、『ポスウェル』軌道上に数機配備した。しかしこれらは最高出力でのレーザーの放射は十数回、戦闘続行時間はわずかに６時間というとても実用的というには程遠いものであり、グラディウスにも武装宇宙機が存在するのだ！という既成事実の呈示にとどまった。その後、『ポスウェル』の領有権をめぐっての不幸な抗争へと発展した『グラディウス』『ラティス』両陣営は、競って本格的な宇宙戦闘機の開発をスタートさせた。

本来、宇宙開発事業を主業務とする『グラディウス惑星航空宇宙局』は、宇宙戦闘機開発事業において民間、私企業の技術を導入し、着手から８カ月後に本格的な宇宙戦闘機《ビックスファ・Mk1》のロールアウトにこぎつけた。機体は大艦巨砲主義時代から兵器を作り続けて来た兵器産業最大手にして老舗の『ガイカニス・ファイアー・アームス社』、エンジンは航空産業の新鋭『ドロマティック・エレクトリック・マスターズ社』であった。この機体こそがグラディウスにおける宇宙戦闘機のアーキタイプ（雛形）となった。

グラディウスにおける後の宇宙戦闘機のアーキタイプとなった《ビックスファ・Mk1》。機首に大出力レーザー発生機を一基搭載。
戦闘宇宙域までの往還用に巨大な二基の固形ロケットを持ち、その表面を耐レーザーブロックで覆っていた。その質量の60%が固形燃料だった。

2 宇宙戦闘、実践の時

『グラディウス宇宙兵器開発局』が提案した宇宙戦闘機の『概念図』。
全長約23m、一基の推進エンジンと複数の姿勢制御ロケット、先端にはパワーユニットからは隔離された乗員スペースが設けられ、機体両端には長いレーザー発射ロッド、二門が装備されていた。

《イーサン・イーグル・Mk4/D》

『概念図』をそのまま具現化した宇宙戦闘機だったが、対ラティス戦開戦初期における名機と言われた。
必要以外の要素を全て取り除いたシンプルこの上ない機体は、生産性にも優れていた。

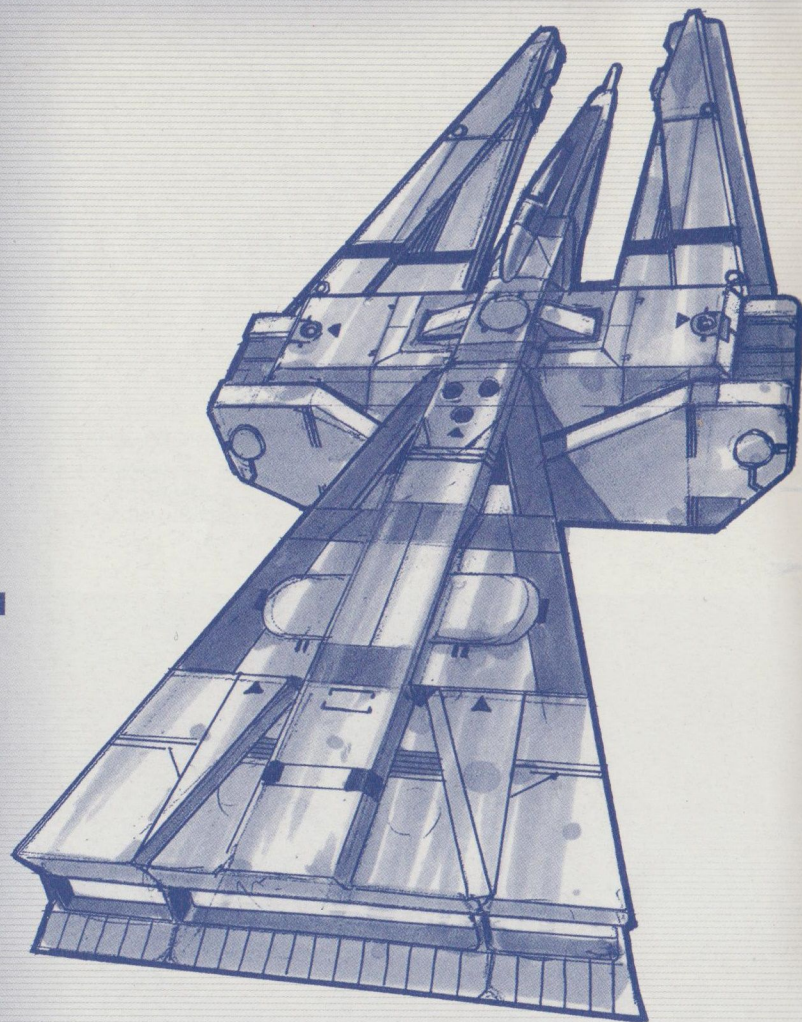
宇宙進出暦0012年1月、『衛星ポスウェル』の領有権をめぐる『グラディウス』と『ラティス』の抗争は星間戦争へと発展した。しかし生物学的に起源を同じくする双方政府は、極めて冷静な側面を持ち、この戦いは両文明同士の全面戦争ではなく、あくまでも『ラティス』の領有権を争うという限定戦争であると位置付けた。グラディウス『惑星航空宇宙局』内には『宇宙兵器開発局』が設立され宇宙戦闘機の開発を急務とし、それらを運用する組織として『宇宙軍』が設立された。『宇宙兵器開発局』はそれぞれ宇宙戦闘機、宇宙攻撃機、宇宙戦艦等の『概念図』を製作、発表しその後の宇宙機の開発のモデルとした。複合技術の集積である『宇宙戦闘機』を開発するため、兵器産業各社は離合集散を繰り返しながらもこのモデルの発展的解答を模索、『ポスウェル防衛戦争』への兵器開発・供給に参加した。

『ブッタラフ・アーカイブス社』は宇宙船のエンジン開発メーカーであったが、傘下の航空産業各社の協力のもと、『概念図』に極めて近い実用戦闘機として《イーサン・イーグル・Mk4/D》を開発・生産し成功を収めた。生産性を最優先した簡素な機体構造は、フレームを持たず、外装の張力に全てを負わせ、物理的に独立したコクピットは被弾時には機体から分離・離脱が可能。強力なレーザーカノン二門を両翼端に装備し、衛星等の重力干渉領域と無干渉領域の双方での自在な運動性までを確保した先進性は対ラティス戦、開戦初期の名機であった。

侵攻中の敵編隊への切り込み隊長となって敵を拡散させ、馬力と速度にものを言わせ敵を追走して撃破する本格的格闘戦闘を可能にしたのは《アルゲイアム・ウルフ》Gシリーズだ。設計思想としては『概念図』そのものであり、また《イーサン・イーグル》の類似品と揶揄もされたが、その実力は敵168機を撃墜したスーパーエースの愛した機体としても有名で、4年間の『ポスウェル防衛戦争』間にのべ12,000機以上が生産された事実がその優秀性を後世に伝えている。

《アルゲイアム・ウルフG/103》

本格的なドッグファイトを実践できる対ラティス戦中期の宇宙戦闘機。
大出力ロケットエンジンと、そして独立したレーザー砲用のバッテリーを搭載し、戦果をあげ宇宙空戦のノウハウを獲得した。

3 対バクテリアン迎撃機を開発せよ!

次期主力戦闘機・試作機
《スタードロックス Mk1・TX》
宇宙機の老舗が開発した対『バクテリアン戦』用戦闘機。
推力・兵装、等の要求性能の大半は満たしていたが、全長は 28 m強と大柄な機体で、機動力に恵まれていなかった。最新の核融合エンジンを搭載。しかしこの機体の最大の特徴である機首の大出力パルスレーザカノン『ヴィザーク』は、後に《ビック・バイパー》量産機へ移植されることとなる。

時は流れ『ポスウェル防衛戦争』で活躍した宇宙戦闘機たちが博物館で眠る時代。相互安全協定と通商条約を結んだ『グラディウス』と『ラティス』両政府だったが、両者は新たな敵の出現に共同戦線を張る必要に迫られた。未知の敵『バクテリアン』の突然の攻勢を受けたのは『ラティス防衛宇宙軍』機動部隊であった。最外惑星軌道でこれらと交戦、数千機のバクテリアン戦闘機軍団との戦闘の結果、戦艦を含めたラティス第一機動部隊は全滅！これに衝撃を受けた両惑星宇宙軍は急遽、従来の宇宙戦闘機の性能を凌駕する本格的迎撃戦闘機の開発に着手した。『バクテリアン』の初めての攻勢から次回の進攻までの八カ月の間に『グラディウス宇宙軍』は各兵器開発部門に『次期主力戦闘機』の開発を依頼した。

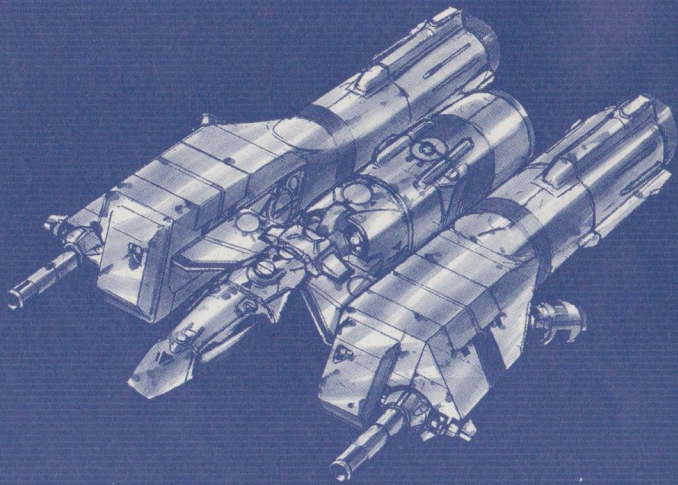
次期主力戦闘機の開発依頼、それは新設されたばかりの『グラディウス宇宙防衛省・星間安全保障部』兵器開発部門からの発注として各民間企業に提示された。計画名を『ミッション・DDD』とし、その依頼内容は航宙防止戦に適した次期宇宙戦闘機（主に迎撃戦闘機としての機能を重視する）を短期間で開発、生産し、グラディウス絶対防衛圏の防備に緊急配備する、というものだった。その要求されたスペックは以下のとおりである。

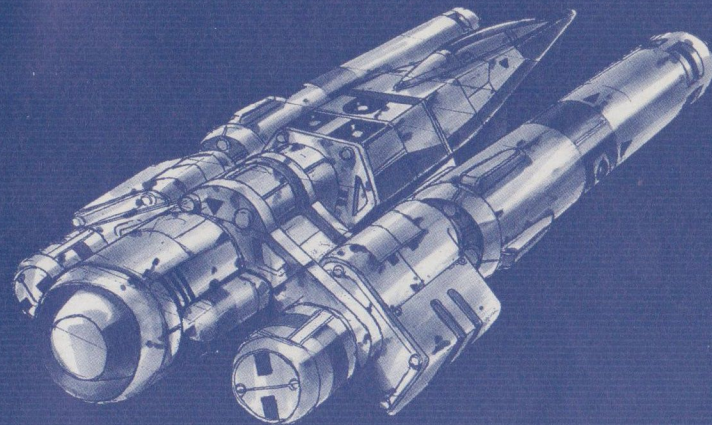
- ●単座・単発（パイロット1名・エンジン1基）の次期主力格闘戦闘機の開発依頼
- ●使用部品 40 万個以内（最終量産検討機体はこれを厳守・メインパワーユニットは除く）
- ●メインテナンス・スキル、レベルBの下、以下
- ●第一戦闘速度マッハ 122 以上（敵主力戦闘機の 1.4 倍以上とする）
- ●戦闘続行時間 12 時間以上
- ●G解消装置を装備
- ●多目標同時処理能力を有するファイアー・コントロール・システム搭載
- ●最大全長 20 メートル以内
- ●機体表面の 80 パーセントにコーバナイト合金を使用
- ●ロングレンジ光学兵装備・破砕ポテンシャルD 1級×1
- ●ロングレンジ実体弾搭載ベイ×9立方m
- ●破砕ポテンシャルD 1に耐え得るエネルギー・シールド（出力 106 メガ・ガルス以上）
- ●パイロットの照合にはバイオマトリクスを採用（動脈照合およびラッセル照合を使用）

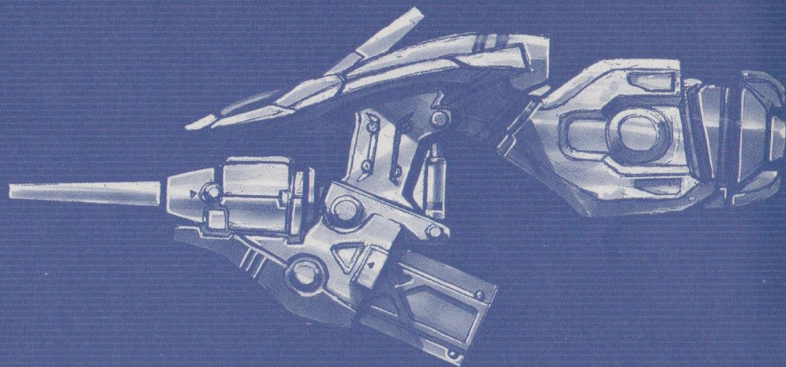
以上の開発依頼内容の根拠は、捕獲した敵『バクテリアン』の主力戦闘機を撃破できる性能を求めた結果で、従って従来の『グラディウス宇宙軍』の対『ラティス戦』のための量産戦闘機たちとは掛け離れた性能の要求となった。

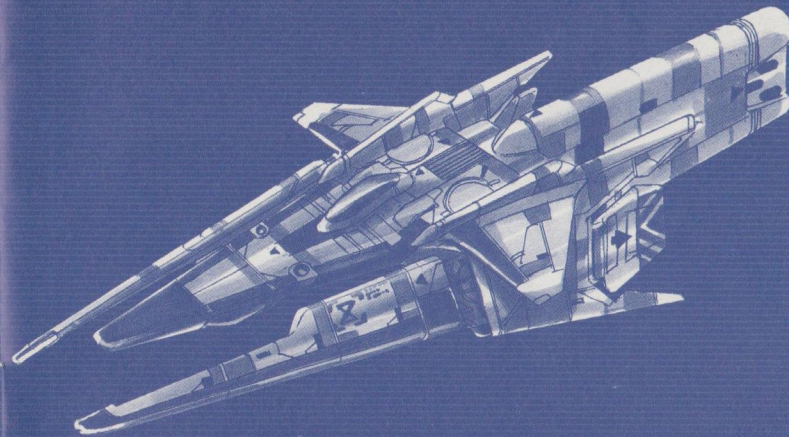
この競作にまず手を挙げたのは、『ガイカニス・ファイアー・アームス社』であった。グラディウスの衛星に初めて人間を到達させた実績を持つ宇宙機開発の老舗であり、統一政府との太いパイプを持つ同社は、この次期主力戦闘機の開発、そして受注に絶対の自信を有し、生産性と構造強度を主眼に据えた迎撃戦闘機《スタードロックス Mk1・TX》を開発した。

機首にレイアウトされた強力なエネルギーカノンは、対戦闘機戦だけではなく出力の調整が可能で、ピーク出力では戦艦に対して致命的破壊をもたらせることが可能という強力な兵装であった。しかし模擬宇宙戦において、旋回性能をはじめとする3次元機動力に難があり、攻撃回避から追尾攻撃へのモード変更がスムースでなく、自慢の大出力エネルギー兵装を生かせないことが判明し、一次審査で落選という憂き目を見てしまった。これは受注後の生産性を重視したあまり、機体構造の簡素化を最優先した結果だった。

最大手の脱落は、それに追従するメーカーたちのチャンスを広げた。かつて惑星グラディウスの近代化直後の巨大戦艦の建艦競争時代から戦艦の大砲を作り続け、現在では宇宙砲台用レーザー砲を開発生産している『デメトリクソン・カノーネ社』、複葉機全盛期から戦闘機を作り続けてきた『ウォーバーズ・ハイパーソン社』、その傘下のインテリジェンス砲弾の開発・生産部門が独立した『トムスン・アタック・マスターズ社』等が参入し、多くの試作機を競作した。

《ツインディ・Mk2・TX 試作機》

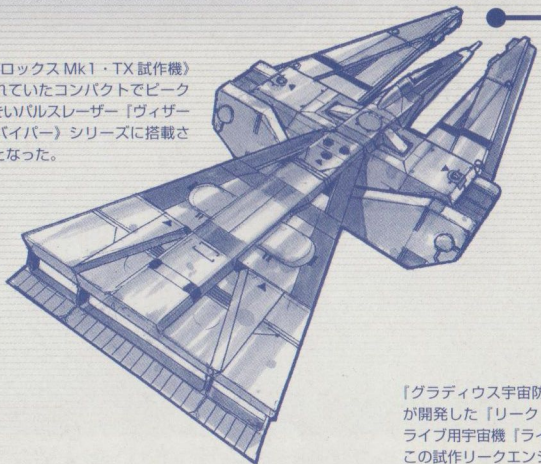
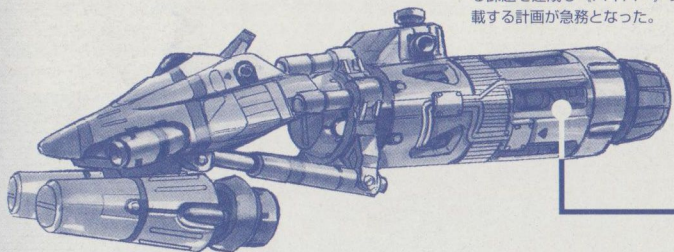
経験豊かな『ブッタラフ・アーカイブ社』が試作した迎撃戦闘機。
二基の強力な核融合エンジンと、それらから直接エネルギーを得る二門のレーザーカノン砲を装備し、機体中央後部に兵装ラックを設けた独特の外観を持つ。要求性能は満たしていたが、エンジン一基という条件を満たせず、この機体はそのまま長距離攻撃機として開発が続けられた。

《マッド・ストライカーD・Mk3 試作機》

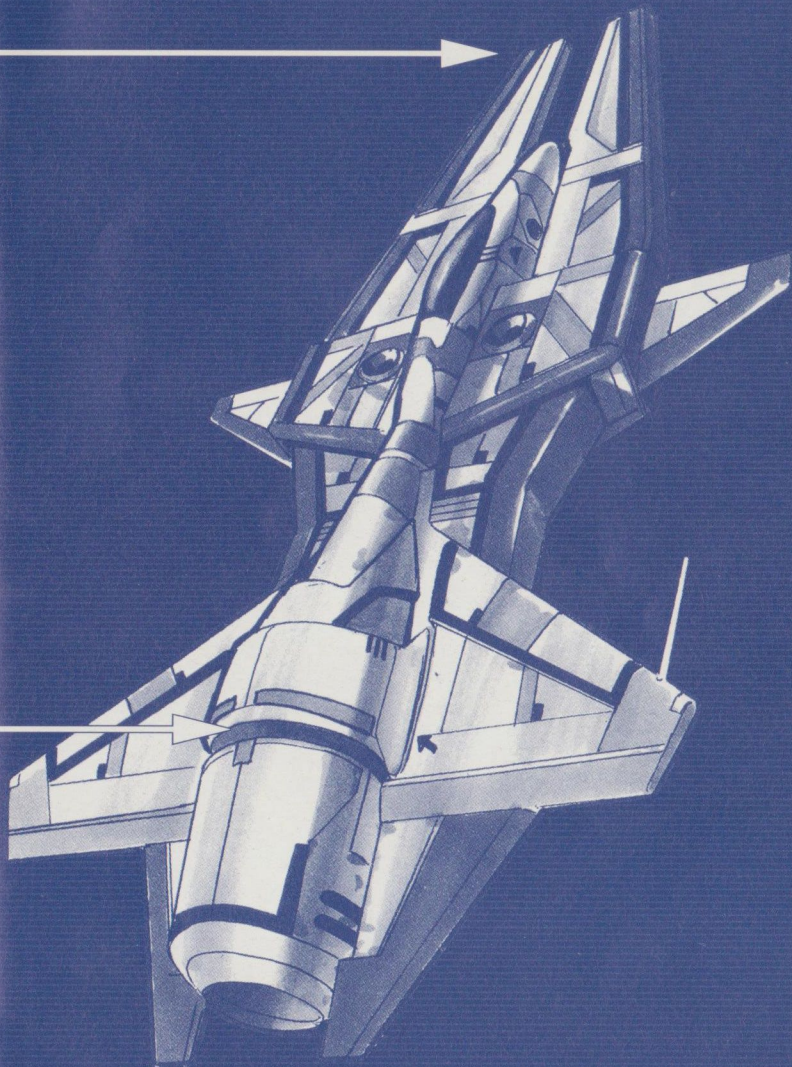
『デメトリクソン・カノーネ社』は自社の駆逐艦用・大出力レーザーカノンを両サイドに装備し、攻撃力を優先した機体を試作した。
レーザーカノンの破壊力は充分に評価されたものの、機体自体のポテンシャルには今後発展性を認めることができない、と判断され試作 2 号機の製作に着手することすらできずこのコンペから脱落してしまった。

《マイン・ドラクーン Mk1・TX 試作機》

最先端のロボットロニクス開発会社『ドグ・アンド・ライズセン・ロボッツ社』が試作した機体。
独立したバッテリーとレーザーカノンを両腕に備え、可動式ロケットエンジンを持つ個性的な戦闘機で、抜群の 3 次元機動力と遠近双方における的確な索敵・捕捉機能を有していたが、構造・整備の複雑さが仇となって採用は見送られてしまった。

《ダーク・バイパーE・Mk1 試作機》

最後にエントリーしたのが、惑星戦争時代以降に設立された極めて新しく、歴史を持たない『クーディック・ランサー・アンド・シールズ社』である。彼らが追求したのはあくまでも敵戦闘機との格闘性に特化した機体で、攻撃力・推力共に不充分！との評価が下されたにもかかわらず、その機動性を重視した設計思想に発展の可能性あり！との期待から、同社には試作 2 号機の製作依頼がなされた。

4 量産試作機《スター・バイパーAX・Mk1》

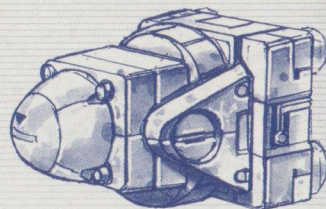
《スタードロックスMk1・TX試作機》に搭載されていたコンパクトでピーク出力の大きいパルスレーザー『ヴィザーク』は《バイパー》シリーズに搭載されることとなった。

『グラディウス宇宙防衛省・兵器開発部門』が開発した『リーク・エンジン』テストドライブ用宇宙機『ライゼット5』。
この試作リークエンジンの質量を1/2とする課題を達成し《バイパー》シリーズへ搭載する計画が急務となった。

新参者である『クーディック・ランサー・アンド・シールズ社』であったが、しかし同社の知性砲弾開発部門は、傑出したテクノロジーで、次々と宇宙戦用の画期的インテリジェント砲弾を開発してきた実力と個性を有していた。敵の艦影を認識・照合して起爆する敵味方識別砲弾や、亜光速ミサイル等の開発・生産を主業務としてきた同社は、宇宙戦闘機の部品の生産部門を有するのみで、宇宙戦闘機の開発・生産に関しての経験は有していなかった。が、開発部門の有志数名の提案により同コンペへの参加を決定。戦無世代でありながら『対ラティス戦』時代のエースパイロットの英雄伝説を読んで育った若き技術部長らが中心となり、この難しいオーダーに応えそして結果を出した。

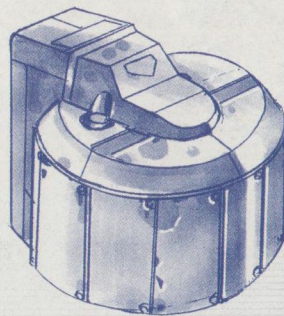
この業態や得意分野を越えての各社の参入は、予測のできない結果を生むこととなる。試作1号機《ダーク・バイパー》が次期主力戦闘機の有力候補と知るや、最大手『ガイカニス・ファイアー・アームス社』は、その専売特許であり基幹技術であるはずの『ヴィザーク』大出力レーザーカノンを小型・軽量化して《バイパー》へ搭載することを提案した。同時に『グラディウス宇宙防衛省・兵器開発部門』が試作した『リーク・エンジン・ユニット』に予想以上の将来性があることが明らかとなり、これを戦闘機用に小型化する提案がなされた。これによってクーディックの試作2号機《ダーク・バイパーF・Mk2》はこれらの二大新技術を獲得し、量産検討試作機《スター・バイパーAX・Mk1》合計3機が製作されることとなった。

《スター・バイパーAX・Mk1》試作3号機

画期的で強力な兵装『ヴィザーク』を機首にレイアウトし、試作『リーク・エンジン』タイプJ・104XXを搭載した試作3号機。
全長は27mを越えてしまい、機体全体の小型化が急がれたが、この機体こそ、後のバイパーシリーズの基点となった機体である。

5 《バイパーシリーズ》の量産化へ

バイパー量産検討試作機《TX006》は、捕獲した敵機との模擬空中戦を繰り返すうちに、バクテリアン戦闘機との相性の良さが際立っていることが判明。
旋回機動性を確かめるため、小惑星群での模擬戦闘を繰り返し、最終的な総部品数の減少を初めとする量産化への準備が始められた。

量産検討試作6号機《バイパーTX・006》は機体の小型化に成功。『グラディウス宇宙防衛省』の全面支援のもと、奇跡的に無傷で捕獲した敵戦闘機（最多量産型、ニックネーム：バタフライ）を相手に、連日、模擬格闘戦が繰り返された。パワーユニットは、すでに同省と共同開発が進められていた『スターダム4000・Mk3・リークライズド・マスター反応炉』を搭載し、この時点で同省からの諸要求性能はクリアし、さらにより高いポテンシャルが追求された。この時点でのグラディウス側の最大の課題は、群隊による波状攻撃によって制宙権を獲得する敵、『バクテリアン』戦闘機編隊の独特な攻撃フォーメーションに対抗する有効な迎撃プランの構築と、それを可能とする索敵、照準シーケンスの完成にあった。多数の高速移動目標に同時にロックオンし、攻撃、そして同時に回避シーケンスにまで同調できる新しいファイアー・コントロールシステム（火器管制システム）『ベーダー』の構築は、宇宙戦艦のレーザー測距儀のシェア100%を誇る『ドミニク・レア・ウォートーイズ社』が完成させた。敵の航跡軌道をトレースできる『ドップラー・リアクティブ・レーダー』とそして画期的なソフトウェアを搭載した"未来位置算出装置"『ジーク』の組み合わせによって具体化した。空中戦においては、敵の現在位置に向かって発砲しても意味はない。数秒後に敵が来るであろう空域に向かって発砲するのだ。その五感と経験によってそれを可能としていた、かつての複葉機時代のエースパイロットたちの神業を、この装置は獲得した。こうして多数の最新技術が、バイパーに集中していくこととなった。

『ドップラー・リアクティブ・レーダー』

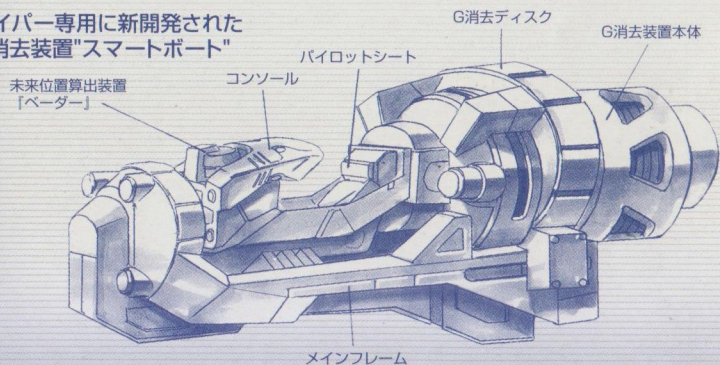
バイパーの機首、レドーム内に搭載された航跡追跡レーダー。
敵の移動物性を把握し追尾できる"敵を見失わない、敵を間違えない"画期的なレーダーである。

未来位置算出装置『ベーダー』

バイパー、コクピット・コンソールに搭載される最も重要で画期的な装置。
回避運動に突入した敵の"未来位置"を驚くべき高確率で保証するソフトウェアを搭載。機体破損時、パイロット死亡時等には敵への技術流出を防ぐため、物理的に高熱溶解して消滅する。

6 G消去装置の開発

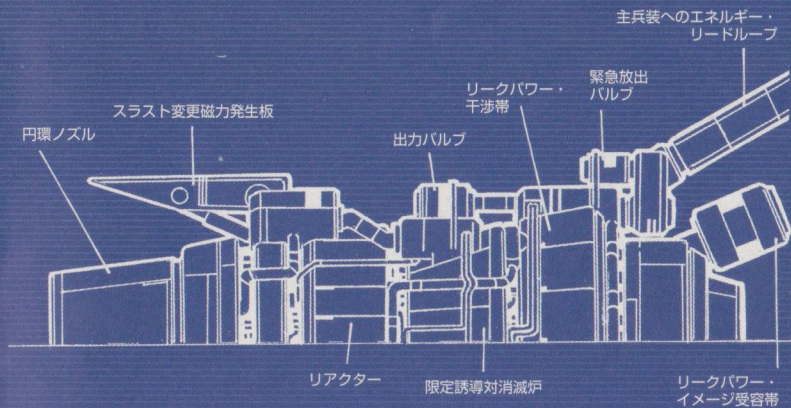
初期の“耐Gチェンバー”はジェルで満たされた棺桶そのもので、パイロットはフロッグマンのような重装備を身に纏って乗り込まなくてはならなかった。

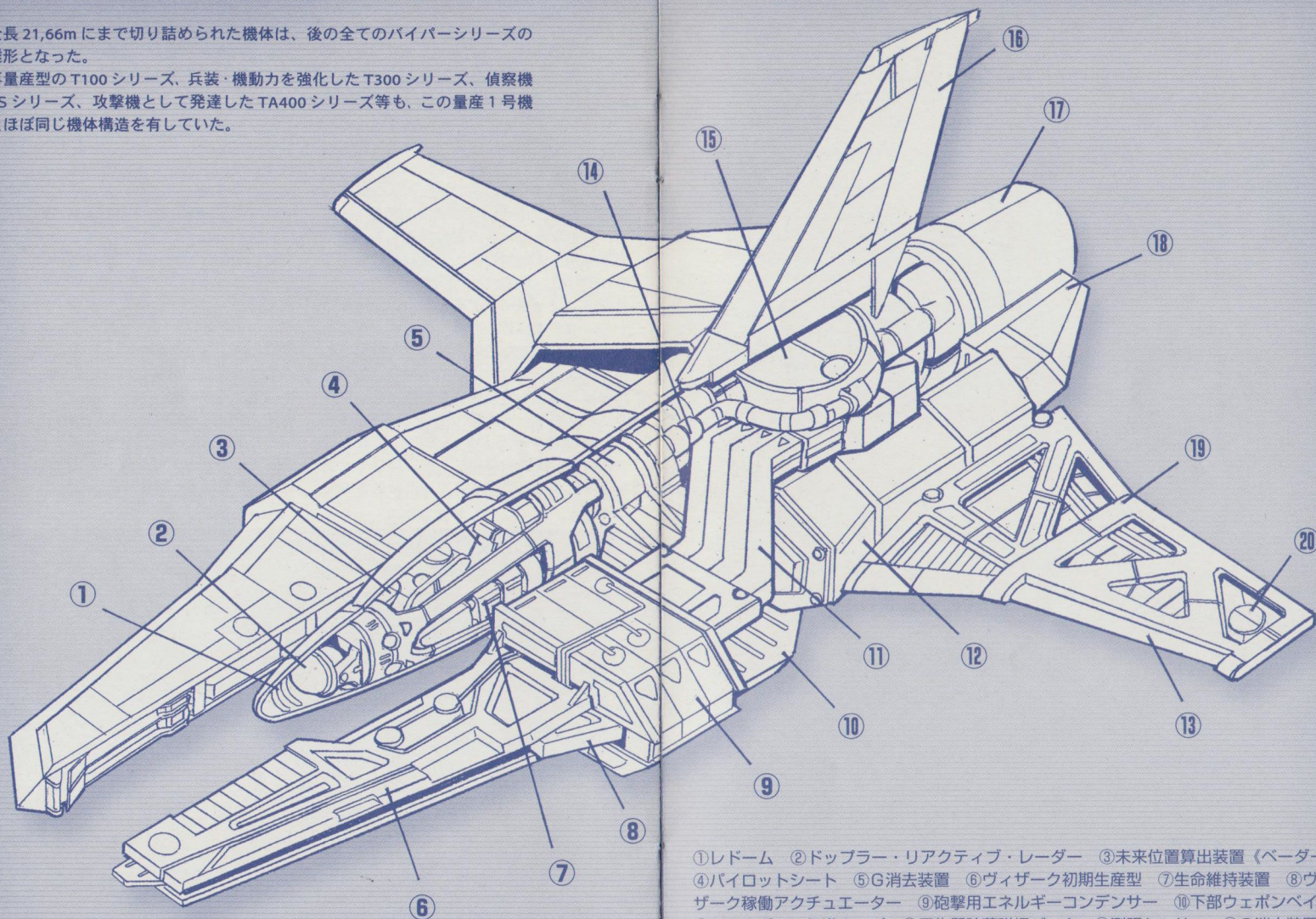
第一戦闘速度が最低でも音速の100倍を越える有人宇宙戦闘機のコクピットには想像を絶する加速・減速重圧“G”がかかる。バイパー・シリーズは初期試作型においても機体構造強度は耐400Gを誇ったが、生身の搭乗員の限界は従来の耐Gスーツを着用したところでせいぜい10Gだった。そこで開発が急がれたのがG消去装置『Gイーター』である。最も初期の試作機は、肺を液体で満たしたうえで、重圧の変化に同調してゲル化するジェルを詰め込んだチェンバーの中にパイロットが潜り込むという大掛かりなもので、“防腐剤入りの棺桶”と揶揄されたシロモノだった。しかし、これでは操縦時のレスポンスは最悪で、パイロットに掛かる負担も限界を越えていた。そこで宇宙戦艦の艦橋にかかるGを軽減、消去する“Gイーター”を宇宙戦闘機のコクピットに搭載可能サイズまで縮小、軽量化する要求が『グラディウス宇宙防衛省』から出され、同省開発部門と『バトル・オーダー・タムデクス社』が共同で、画期的な“G消去ディスク”内蔵のコクピット一体型『Gイーター S101・スマートボート』を完成させた。G吸収素子“フレディ”を盤面に固定し高速回転さることで発生する無限大に小さい"フィールド"が、その前方4立方m内のGを吸収、消去するこのシステムは、バイパー・シリーズで成功を収めた後、他の高速戦闘機、攻撃機にも広く使用されることとなり、パイロットも大気圏内戦闘機とほぼ同等の軽装で宇宙戦闘機に搭乗が可能となった。

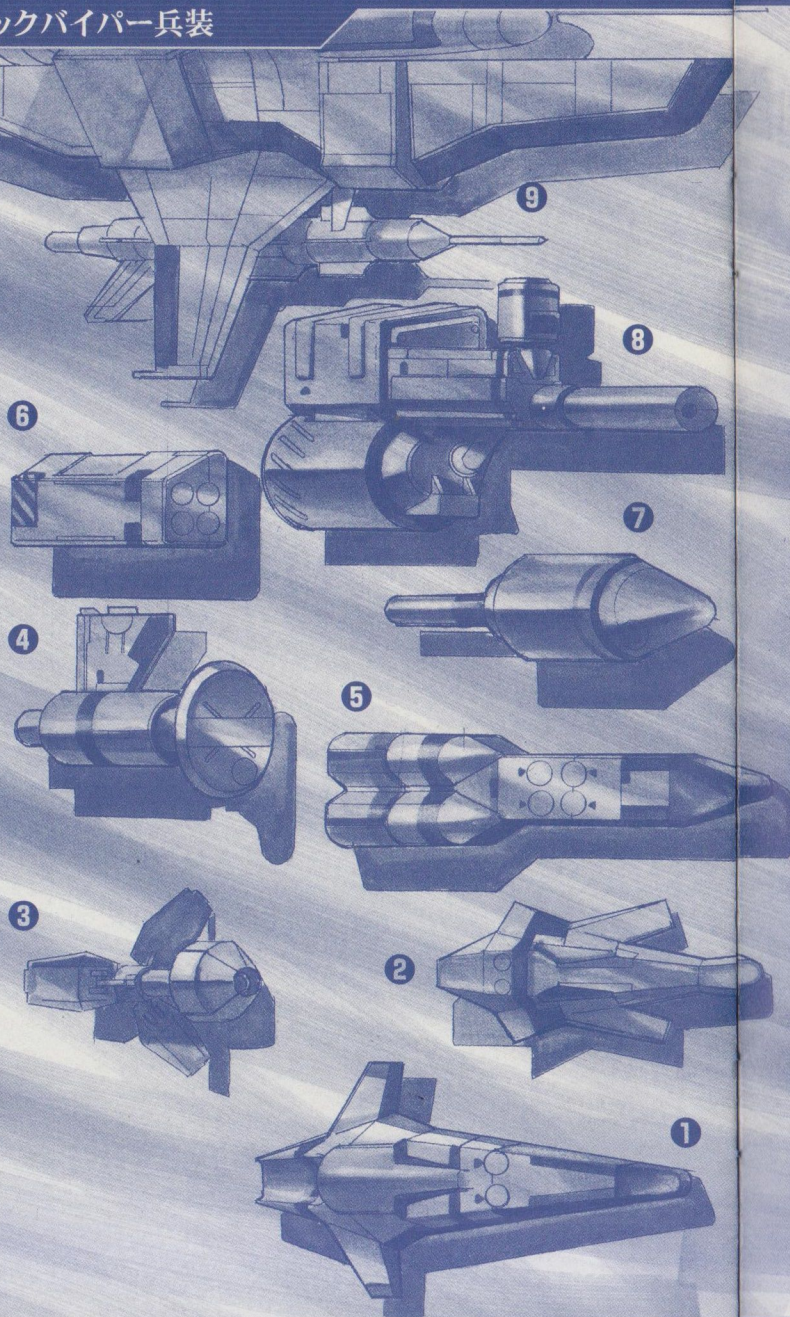
バイパー専用に新開発された G消去装置"スマートボート"

7 リークパワーユニット

『グラディウス宇宙防衛省』が開発した『スターダム4000』パワーユニット・シリーズは、以前より理論的には確立されていたもので、リーク人の持つ最大の特性である“リークパワー”を宇宙船の推進機能とリンクするものである。後年の研究によれば、グラディウスにおけるマイノリティであるリーク人は、有史以前にグラディウスに飛来したコスモトライブ（宇宙適応種）ではないかとされている。彼らはもともと大宇宙航海用に人為的に改ざんされた特性を所有しており、優れた空間認知能力、未来予知、リモートビューイング等の能力はたんなるその一端が表出したものに過ぎず、もともと大宇宙航行のための未知の永久機関を動かす原動力をその内に秘めており、反物質対消滅ユニットの発生させた推力を、彼らのリークパワーで増幅、さらには指向性を持たせ誘導できるというこのシステムは、今回開発、構築に成功したのではなく、遥か過去にすでに構築されていたシステムであり、それを追従、再生したにすぎないのかも知れない。同省・技術管理部の技術主任は「かつて存在した超科学とは、未来を見通せる航海士と、推進エネルギーを別空間から租借して来る事の出来る機関士たち数名のリーク人が、何も無い空洞の円盤に搭乗して大宇宙を自在に航行し、そしてなんらかの事故、災害にみまわれ、このグラディウスに漂着したのかも知れない」としている。

核となる“限定誘導対消滅炉”は、宇宙戦闘機のメインエンジンとして開発された反物質エンジンで、その外周を“リークパワー・干渉帯”で覆い、最大で従来のマックス出力の3.4倍時の推力を得られ、しかもその制御は、搭載されている制御ユニットではなくリークパワー内の『フィールド認知・操作能力』によって行われる。しかしこの優秀なシステムは全てのリーク人に適応できるものではなく、適切な能力開発によって発現する特性が必要である。

初期のリークエンジン『スターダム4000・Mk3』（リークライズドド・マスター反応炉）

8 量産１号機《ビックバイパー》透視図

全長21,66mにまで切り詰められた機体は、後の全てのバイパーシリーズの雛形となった。
再量産型のT100シリーズ、兵装·機動力を強化したT300シリーズ、偵察機TSシリーズ、攻撃機として発達したTA400シリーズ等も、この量産１号機とほぼ同じ機体構造を有していた。

①レドーム　②ドップラー・リアクティブ・レーダー　③未来位置算出装置《ベーダー》④パイロットシート　⑤G消去装置　⑥ヴィザーク初期生産型　⑦生命維持装置　⑧ヴィザーク稼働アクチュエーター　⑨砲撃用エネルギーコンデンサー　⑩下部ウェポンベイ　⑪エネルギー・伝導ループ　⑫反物質貯蔵磁場バンク　⑬測距センサー　⑭G消去装置へのエネルギー・ループ　⑮エネルギー・シールド発生用バッテリー　⑯亜空間通信ＡＮＴ　⑰円環ノズル　⑱磁気変更ノズル　⑲耐誘導兵器用エネルギーシールド・ジェネレーター　⑳敵味方識別信号発信機

9 ビックバイパー兵装

量産され、バイパーが実戦において戦果をあげるにしたがって、軍需産業各社はバイパー専用の追加兵装備を提案、生産し始めた。それらはバイパーの戦闘機としての機能の向上、そして対艦攻撃力の向上や、長距離攻撃用の遠隔兵器、あるいは自律兵器が中心で、バイパーの攻撃力の増大を目指すものであった。これらの兵装は後に改良され、バイパー以外の攻撃機や爆撃機にも搭載され、対バクテリアン戦争で活躍した。

①タグバード超長距離巡航ミサイル
亜光速まで加速が可能。最大航続距離 600 万キロ。反陽子弾頭ないし対消滅弾頭を搭載し、一撃で重戦艦を駆逐できる破壊力を持つ。

②ベムトレー残像投影機
敵ドップラーレーダーに母機（バイパー）と同じ機影を投影し敵を欺瞞する無人ドローン。

③オプション遠隔誘導弾
攻撃、防備を行う独立機動弾子。

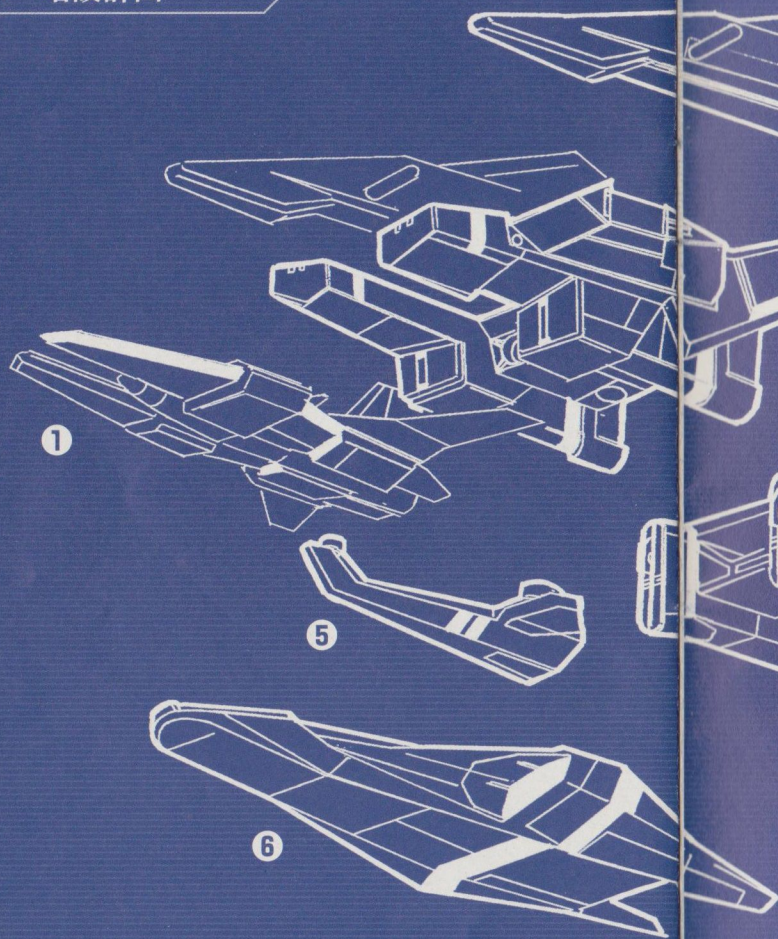
④湾曲空間察知レーダー
ワープアウト時に生じる空間の歪みを感知するレーダー。空間トラップを 40 万キロ先から感知する能力を持つ。

⑤ストマック超長距離無人偵察機
航続距離 800 万キロの無人機。索敵システムの中枢。

⑥対戦闘機ベムトレー拡散ミサイルポッド
40 万発の小型硬質弾子を広範囲に散布し敵戦闘機機体を貫通、破壊する。

⑦ベムトレー空間湾曲弾
小特異点を発生させる特殊弾頭。超高速航行する艦船等を破壊することが可能。

⑧ライドック・スーパー・カノン
超硬質実体弾を分間 3000 発射出する近接火器。

⑨ベムトレー近接ミサイル・タイプL
多数の弾頭を搭載可能な亜光速ミサイル。

ビック・バイパー追加装備

①ビック・バイパー（タイプT100～TV800） ②長距離航行用追加プロペラント・タンク×2 ③追加ウェポン・ラック ④ワープエンジン用プロペラント・タンク ⑤下部固定ロッド ⑥帰還時用追加プロペラント・タンク ⑦ワープエンジン・ユニット

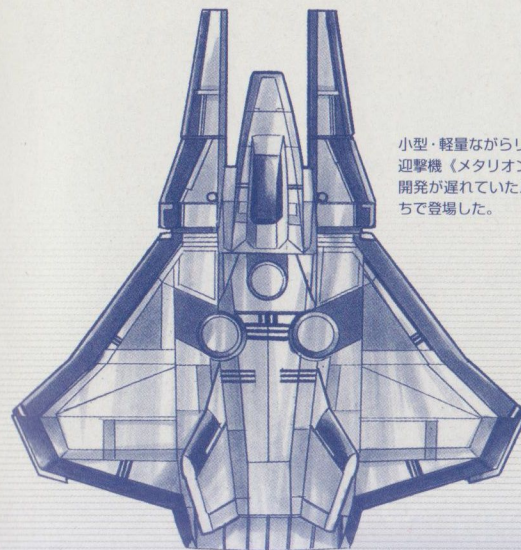
バイパー・シリーズ、タイプT100～TV800までの迎撃、偵察、攻撃機各機種を対象とした機能拡張計画はバイパー・シリーズを開発した『クーディック・ランサー・アンド・シールズ社』によって提案され、多くの軍需産業各社からの技術協力によって開発が進められた。基本指針は、バイパーを中心とした攻撃力、航続距離の増大を可能とする追加兵装システムの開発である。リーク人をパイロットとする限りリークエンジンを搭載したバイパー・Tシリーズの生産機数は限定される。そこで一機の持つポテンシャルの向上を試みる計画が始動した。まず、航続距離を増大させるプロペラント・タンクを追加し、さらに攻撃機なみの巨大なウェポン・ラックを装着することで、攻撃機としての機能を発揮させ、プロペラント・タンクおよびウェポン・ラックは使用後は投棄し、ドッグファイトを行い帰還する、というもので、更に敵進攻作戦を砕くため、ワープエンジン・ユニットを装着し超長距離攻撃機としての機能を追加するという勇ましいものだった。

しかし度重なるテストドイブの結果、パイロットへの負荷が著しく増大し、敵との交戦時に集中力を失い、好ましい結果を得ることはできなかった。結局打開策として、航行時には別のもう一人のパイロットが操縦を担当し、リーク人パイロットはガンナー（射撃手）に徹するという複座の長距離攻撃機タイプのバイパーが立案、設計されることとなった。

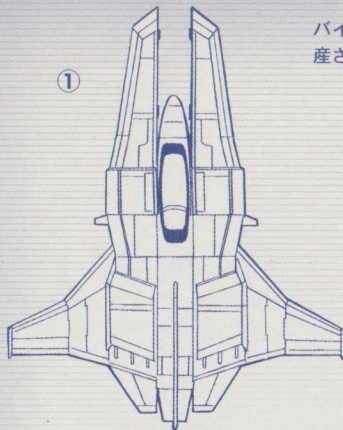
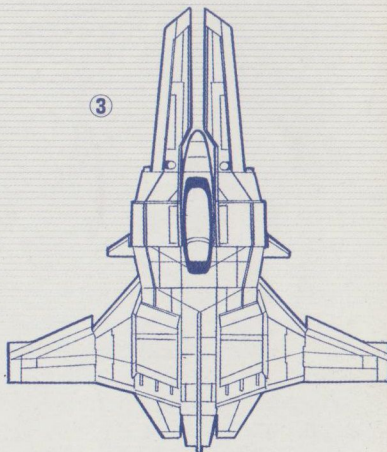
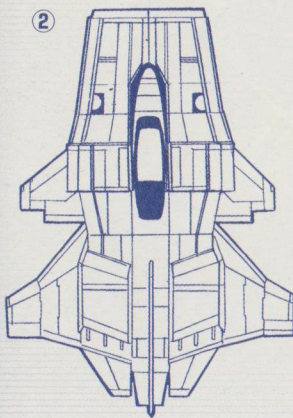
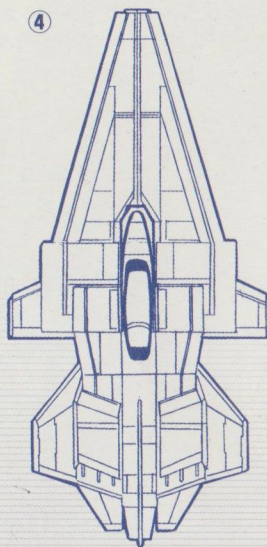
11 バイパーの後継機を開発せよ！

①
②
③
④
⑤
⑥
⑦

バイパーシリーズの成功で『クーディック・ランサー・アンド・シールズ社』は業界の寵児となり、大戦中の最盛期にはバイパーの生産が追いつかず、総生産機26,200機のうち2/3は他社にライセンス生産を許諾して補うほどだった。しかし『第一次メタリオン星系防衛戦』の後、その後継機の開発には出遅れた。

『クーディック・ランサー・アンド・シールズ社』がバイパーの生産に追われているころ、各社は次期主力戦闘機の開発に着手していた。①はブッタラフ社の《リベレータ小型戦闘機》で一撃離脱に特化した迎撃機だ。②はガイカニス社の長射程レーザーを二門搭載した攻撃機をベースとした《ランサー迎撃機》。③は宇宙防衛省の開発した《クラブ２迎撃機》で攻撃時に機体が可変・開口して高出力ビームを放射する意欲作だった。④⑦はいずれもデメトリクソン社の格闘戦闘機《フレア２》と《ダモス４》で、バクテリアンの戦術を参考に小型・大量生産で戦力の総体の向上を目指そうとした。⑤はドロマティック社の大型迎撃機《ファイアーロード１》で、駆逐艦搭載用の大型ロングレンジ・レーザー・カノンを二門装備しいるにもかかわらず高速を誇り、しかも敵ドップラー・レーダーに捕捉されない特性を持っていた。そして⑥がクーディック社が提案したバイパー・シリーズの後継機《スーパー・バイパー03》で、魅力あるスペックを満載していたがコンペには出遅れ、モックアップのみの提出に留まってしまった。しかし実は他社の多くの試作機も、大戦中の攻撃機や迎撃機の機体やその一部に改良を加えた“暫定試作機”であった。がそんな中、突如完全な量産試作機を提出したのが、大戦中にバイパー・シリーズのライセンス生産を受注していたミサイル兵装メーカー『シムズ・ストライク・デリバリー社』で、彼らは従来の技術の寄せ集め、と揶揄されながらもバランスの取れた、そして生産性の良い《メタリオンX01/B》試作迎撃機を完成させ、最終量産型となったビックバイパーTTS41型以降、性能の向上が望めなくなったバイパー・シリーズの継承機体と期待された。

小型・軽量ながらリーク・パワーユニットを搭載した迎撃機《メタリオンX01/B》試作迎撃機。
開発が遅れていたバイパー後継機の地位を奪うかたちで登場した。

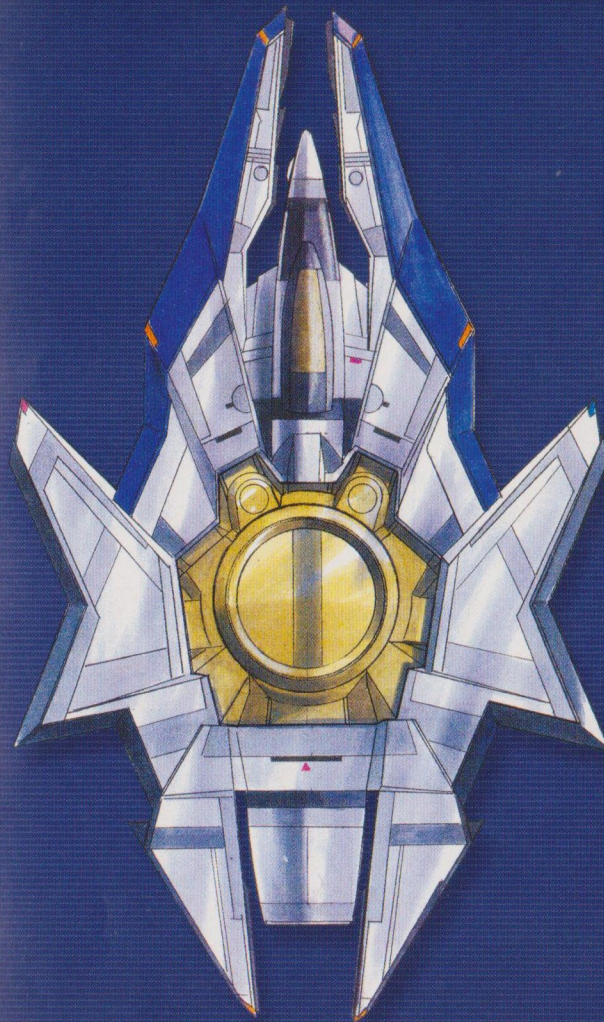
12 大戦中のバイパー派生型

バイパーはバクテリアン戦争中に多種の派生型が生産された。その様々な派生型の一部がこれらの機体だ。

①

③

②

④

①ビックバイパー量産型
Tシリーズおよびノーマルタイプと呼称される最量産型。同時に最も消耗が激しく、他のバイパーのベースとなった機体。総生産機数の91パーセントをこのタイプが占めるメタリオン星系を守った救国の戦士である。

②ビックバイパー迎撃型
迎撃に特化したＴＥシリーズの代表的機体。
ショートレンジ・連射タイプのヴィザーク・カノンMk8を機首に装備、航続距離を犠牲にし旋回機動力を向上し、より小型となった機体。

③ビックバイパー後期量産型
測距、索敵機能向上を目指しウィングスパンを延長し、ヴィザーク・カノンの最終量産型Mk17を搭載した性能向上機体。バランスの取れた傑作機体だったが生産数は全体の６％にも満たなかった。

④ビックバイパー長射程型
大戦に間に合わず、６機のみが生産された超長距離攻撃用SLタイプ。
駆逐艦キラーとなるはずだった遅すぎた精鋭。

ビクトリー・バイパー試作機《XX03》
主力戦闘機の座を一時《メタリオン迎撃戦闘機》に奪われたクーディック・ランサー・アンド・シールズ社がその社運を掛けて開発に挑んでいる新しいバイパー・シリーズの試作機。
そのスペックの詳細はいまだ明かされていない。